園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2025 年 10 月号

人は毎日見ているもの、接しているものに心が似てくる

●鍵山秀三郎さん（2025年１月２日に 91 歳で逝去）は、イエローハットの創業者です。28歳の時に自転車１台の行商から事業を起こし、同社を東証一部上場企業にまで育て上げました。鍵山さんが生涯大事にしていたのが「掃除」です。創業時から長年にわたり鍵山さんが毎日一人で行い続けた自社のトイレ掃除が、やがて社内外の多くの人の共感を呼び、今では日本全国はもとより世界各地に「掃除に学ぶ会」が広がり、掃除が実践されています。


（引用：東洋経済オンライン）



●私が鍵山さんの存在を知ったのは２０代後半の頃、当時の職場の先輩から「凡事徹底」という本を紹介されたのがきっかけです。当時私は生まれ故郷である栃木県の小さな郵便局から東京の本社に異動してきたばかりで、華々しい経歴を持った才能の塊のような先輩や同僚の存在に対し、なんとか

自分の価値や居場所を見出そうともがいていた時期でした。

●職場のトイレの洗面台には飛び散った水を拭くための雑巾が置いてあったのですが、普段その雑巾を手に取る人は滅多に見かけません。しかしある時、毎回その雑巾を使って洗面台にはねた水を綺麗に拭き取っている一人の先輩の存在に気付きました。しかもその先輩は、自分の使った水道付近のみならず、残りすべての水周りを、周囲に人がいなくなったのを見計らってせっせと拭いていたのです。日を追うごとにその行動に興味を抱いた私は、ある日人知れず拭き掃除を実践中の先輩に後ろから話しかけ、そこまで拭き掃除をする理由について尋ねてみました。


（イメージ画像）

●先輩は最初、それほど面識のない私から突然鏡越しに話しかけられた事に驚いた様子でしたが、少し照れながら次のように答えてくれました。

「いつも自分がこうしてトイレを綺麗に使えているのは、毎日欠かさずトイレ掃除してくれている人のおかげなんだから、せめて自分ができる範囲で手伝いたいなと思ってて。どんなに時間がなくても、これだけはルーチンとしてやるぞって決めてるんだよね。」

　私はその回答に対し何とも言えないカッコよさを感じました。その先輩は、社内で際立って目立つ存在ではなかったのですが、常に上司や同僚、他部署の人間から頼りにされ、先輩の周りにはいつも気さくに人が集まっていました。

●このやりとりをきっかけに、私も先輩のルーチンを真似することに決めました。そして、この先輩と仲良くなった後に読むことを勧めてくれたのが鍵山さんの著書「凡事徹底」だったのです。

●鍵山さんのその他の著書も読み進めていくうちに、創業当時、これまでの人生や営業で荒みきった社員の心を穏やかにするために始めたのが自社のトイレ掃除だったということ、しかしその行動も、当初は社員から全く見向きもされなかったということを知りました。

汚い環境の中で彼らに「ちゃんとしろ」と言ったってできるわけがない。まず私が環境をきれいにしてから、伝えるべきことを伝えていこう、と。その第1番がトイレ掃除であり、社屋の掃除でした。しかし「掃除なんかしても無駄だ」「うちの社長は掃除しかできない」と陰で批判する者もいましたし、私がトイレ掃除をしている横で用を足していく者もいました。最初の10年間は私独りで掃除をしていて、手伝おうという社員

は１人もいませんでした。

●ここにさらっと書かれている「10 年」という月日の長さに私は読んでいて言葉を失いました。しかし鍵山さんはそれでもトイレ掃除を辞めることはなかったのです。

しかし10年を過ぎた頃から、社員が1人、2人と手伝うようになりました。ただし、今日やったと思ったら明日はもうやらないという感じで波はあります。
それがだんだんと浸透していって、20年を過ぎた頃には、大方の社員が掃除をやるようになった。社内だけでなく、近所の道路など広い範囲で掃除するようになりました。

●トイレ掃除という、一つのことを１日も休むことなく20年続ける…。容易に真似できることではありません。しかし、今や世界各国に伝播した大きなムーブメントの源流が、たった一人の小さな決意と行動の積み重ねにあったことに、ただただ感動しました。

●そんな鍵山さんの著書との出会いだったのですが、実はその後、幸運にも鍵山さんご本人にお会いする機会に恵まれました。それは、ある出版社主催の記念講演会に参加するために赴いたホテルオークラでのこと、偶然同じエレベーターに乗り合わせたのです。他の方が皆エレベーターを降りていく中で、鍵山さんは最後の一人が降りるまで扉の脇で「開」ボタンを押したまま「お先にどうぞ」と微笑んでいました。すぐに憧れの鍵山さんだ！と確信した私は、胸の高鳴りを抑えながらも

（話しかけよう。こんなチャンスは二度とない！）

と勇気を出して次のように切り出しました。

「失礼ですが鍵山秀三郎さんですよね。私は鍵山さんの著書を読んで以来鍵山さんのファンになりました。そのうえで、トイレ掃除についてどうしてもお聞きしたかったことが一つあるのですが、お尋ねしてもよろしいですか。」

「ええ。どうぞ。」

私は緊張しながらこう聞きました。

「社員の荒んだ心を立て直す方法としては他にもいろいろ選択肢があったと思うのですが、最終的にその中からどうして、『トイレ掃除』という方法を選んだのですか。」

鍵山さんは、当時を思い出すような表情をし、その後ちょっと困ったような、クシャっとした笑顔で優しくこう答えてくださいました。

「それは当時私なりに真剣に悩んだ結果、毎日できることといったらそれしかないと感じたからだと思います。」


（引用：日本経済新聞）

●その言葉を聞いた時、私の脳裏には前述の先輩の言葉とこの鍵山さんの言葉が火花を上げるかのように繋がり、背中に鳥肌が立つのを感じました。世の中に良い影響を与える行動とは、例え派手さや華やかさがなくても、一見泥臭い、やろうと思えば誰だってできることを、誰も追随できないほど積み重ねること――。鍵山さんの言う「凡事徹底」が意味する所が妙に腹落ちしたことをよく覚えています。

●さて、冒頭に書いた「人は毎日見ているもの、接しているものに心が似てくる」という鍵山さんの言葉は、トイレ掃除を始め、物的環境が人の心に与える影響の大きさ・大切さを伝えるものですが、鎌倉時代、日本に曹洞宗を伝えた道元は、次のような言葉を残しています。



曹洞宗　道元



古人曰く「霧の中を行けば覚えざるに衣しめる」と。よき人に近づけば、覚えざるによき人となるなり。
（正法眼蔵随聞記　懐奘）

●朝霧が立ち込める早朝の高原を散歩していると、思いがけず衣服がしっとりと湿っていることがある。これと同じようなことが人の出会いにも起こる。すなわち人格の優れた立派な人のそばに身を置けば、知らぬ間に自分もその影響を受け、人格が自ずと陶冶されていく――日頃どういう人と関わることが大切か、またどう人と関わるべきかを説く道元の声が、

弟子の懐奘の筆録を通じ時空を超えて今にも聞こえてきそうです。

●最後にこれらの気づきを保育環境にあてはめて考えてみます。まず物的環境としては、常に掃除が行き届き清潔で安全であること。温かみがあり気持ちが落ち着き寛げること。こういった環境を継続して提供できるよう努力することが大事です。

そして、そういった物理的な環境だけでなく、保育者の言葉遣いや言葉掛け、表情、応答的な対応といった人的な環境が、子どもの健全な成長・発達に有益であることは言うまでもありません。

●もちろん私たちミル保育園はまだまだ若輩者の集団であり、とりわけ人間力の部分では不断の研鑽を積み上げる必要性を感じています。しかし、大切なことは職員が一丸となって常に理想を高く持ち、そうした環境を目指し、凡事徹底することではないかと考えています。

●保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場所に当たります。だからこそ、物心両面において清浄明潔な環境を目指していきたいと考えています。

園長　橋本　英明





９月３０日　植えようフェスの様子